骸骨館

海野十三

廃工場（はいこうじょう）の町

少年たちは、遊び方に困っていたし、また遊ぶ場所もなかった。

家と道のほかは、どこも青々とした家庭菜園（かていさいえん）であった。道さえも、その両側がかなり幅（はば）をとって菜園になっており、その道を子供が歩くときでも、両側からお化（ば）けのように葉をたれている玉蜀黍（とうもろこし）や高粱（こうりゃん）をかきわけて行かねばならなかった。

そういうところを利用して、少年たちはかくれん坊

のあそびを考えついたこともあったけれど、それは親たちからすぐさまとめられてしまった。せっかく作った野菜が少年たちによってあらされては困るからだった。

「つまらないなあ」

「なんかおもしろいことをして遊びたいね」

「ベースボールをしたいんだけれど、グラウンドになるような広いところがどこにもないね。つまらないなあ」

清(きよし)君、一郎君、良(りょう)ちゃん、鉄(てつ)ちゃん、ブウちゃんなどが集まってきて、このおもしろくない世の中をな

げいた。

「あ、あるよ、あるよ」

ブウちゃんが、とつぜんでっかい声を出してさけんだ。

「あるって、何がさ？」

「つまりベースボールがやれる広い場所さ」

「へえ、ほんとうかい。どこにある？」

「アサヒ軍需興業（ぐんじゅこうぎょう）の工場の中さ。あの中なら広いぜ」

「なあんだ、工場の建物の中でベースボールをするのか」

この町をいつまでもきたならしい灰色に見せておく

のは、そのアサヒ軍需興業の廃工場の群（むれ）だった。終戦後（しゅうせんご）その工場は解散となり、それからは荒れるままに放（ほ）っておかれ、今日となった。同じ形の、たいへん背の高い工場が、六万坪という広い区域に一定（いってい）のあいだをおいて建てられているところは殺風景（さっぷうけい）そのものであったし、それにこのごろになって壁は風雨（ふうう）にうたれてくずれはじめ、ところどころに大きく穴があいたり、屋根がまくれあがったり、どう見ても灰色の化物屋敷のように見えるのだった。

それにこの荒れはてた工場については、数箇月前のことであるが、恥（はじ）の上塗（うわぬ）りのようなかんばしくない事

件がおこった。それはこの工場に隠匿物資があるはずだとて、大がかりな家さがしが行われたのである。その結果、一部のものは発見されたが、その捜査の第一番の目あてであったダイヤモンド入りの箱は、ついにさがしあてることができなかった。その宝石箱には、この工場で使うダイヤモンド・ダイスといって、細い針金つくりの工具をこしらえるその資材として総額五百万円ばかりの大小かずかずのダイヤモンドが入っているはずで、中にも百号と番号札をつけられたものは三十数カラットもあるずばぬけて大きいダイヤモンドで、これ一箇だけでも時価百五十万円はするといわれ

ていた（このダイヤは、ある尊(とうと)い仏像(ぶつぞう)からはずした物だといううわさもあった）。なぜこのダイヤの箱が見あたらないのか。あまり大きくもない箱だから他の品物とまぎれて焼き捨てられたのかも知れず、あるいはひょっとするといつの間にか盗難にかかったのかもしれないということだった。だがそれほどの貴重(きちょう)なものを、わからなくしてしまうというのは、おかしいというので、工場は何回にもわたって厳重(げんじゅう)な捜査(そうさ)が行われた。だが、やっぱり見つからずじまいであった。終戦直後はみんなが生ける屍(かばね)のように虚脱状態(きょだつじょうたい)にあったので、ほんとうにうっかり処分されてしまったのか

も知れなかった。とにかく今もその謎は解（と）けないままに残されている。

作者（わたくし）は、百号ダイヤのことについて、あまりおしゃべりをすごし、かんじんの清君たちの話から脱線（だっせん）してしまったようだ。では、章をあらためて述べることにしよう。

胆（きも）だめし

少年たちは柵の破れ目から、廃工場のある構内へ入っていった。一番手前の工場からはじめて次々に工場の内部をのぞいていった。どの工場も、窓ガラスが破れているので、そこからのぞきこめばよかった。破れ穴が高いときには少年の一人が他の少年に肩車すればよかった。

一番目から三番目までの工場は、いずれも中でベースボールをするには向かなかった。そのわけは、工作機械がさびたまま転がっていたり、天井からベルトが蔓草のようにたれ下っていたりしたからである。しかし四番目の廃工場は、それらとはちがって機械類は見

えず、中の土間全体が広々としていた。もっともその土間には、少年の背がかくれるほどの丈（たけ）の長い雑草（ざっそう）がおいしげっていて、荒涼（こうりょう）たる光景を呈（てい）していた。

「ここならいいね。この草をすっかり刈っちまうんだよ。そうすれば、ここをホームにしてあっちへ向いてやれば、ベースボールができるよ」

ブウちゃんは土木技師（どぼくぎし）のように、グラウンドの設計をのべた。

このときみんなの中で一番年上の清君と一郎君とが話をはじめた。

「ねえ、あれをしようよ、一郎君。あれをするにはお

あつらえ向きの場所だよ。ちゃんと舞台もあるしね、ほら、あそこを〝地獄(じごく)の一丁目〟にするんだ。すごいぜ、きっと……」

「ああ、そういえばいい場所だねえ。舞台の前にはこんなに雑草が生えていて、ほんとうに〝地獄の一丁目〟らしいじゃないか」

「ね、いいだろう。さっそく準備にとりかかろうや。みんな手わけをして作れば、今夜の間に合うよ。そして胆(きも)だめしの当番は、あそこのくぐり戸からこっちへ入るんだよ。そして鉦(かね)をかんかんと叩(たた)かせ、それから〝ううッ〟て呻(うな)らせ、それがすんだら最後に縄(なわ)をひっぱ

らせるんだ。その縄は、みんなの集まっている工場のへいの外のところまでつづけておいて、その縄には缶詰の空缶（あきかん）を二つずつつけたものを、たくさんぶらさげておくんだよ。縄をひっぱれば、がらんがらんと鳴るから、ははあ当番の奴はたしかにこの工場の中へ入ったなと、みんなの集まっているところへ知れるわけさ。そうすれば、ずるして途中で引返した奴はすぐ分っちまうからいいじゃないか」

「じゃあ、その縄はうんと高く張らなくちゃあね。それから、くぐり戸を入ったすぐの壁に、自分の名前を白墨（はくぼく）で書かせようや」

「それもいいなあ。それから地獄の一丁目の舞台だが、何を出す。幽霊かい。南瓜のお化けかい。それとも骸骨かい」

「うん、骸骨がいいや。清君、僕おもしろいことを発見したんだよ。骸骨をほんとうに本物のようにおどらせることさ」

「えっ、何だって。骸骨を本物のようにおどらせるって、どういうこと?」

「つまり、骸骨がほんとうに生きているようにおどるのさ。骸骨が生きているわけはないけれど、そんなように見せるのさ」

「骸骨をこしらえて、それをぶら下げて動かすのかい」

「そうじゃないんだよ、僕たちのからだを骸骨にこしらえるんだ。それにはね、まずはじめに白粉（おしろい）で骸骨の骨の白いところをかいてしまうんだ。上は顔から、下は足までね。それから残ったところを鍋墨（なべずみ）か煤（すす）かでもって、まっくろに塗っちまうのさ。そうすると僕たちが骸骨に見えるじゃないか、前から見ればね」

「はだかになって、その上に白粉や鍋墨を塗るんだね」

「そうさ。そうしてね。あそこを舞台にして、その前でおどるのさ。舞台のうしろの壁は、まっくろにペンキが塗ってあるからね、あの前でおどれば、僕たちの

からだの鍋墨のついている部分は黒い壁といっしょにとけあって、見分けがつかなくなる。だから白粉をぬってある骸骨のところだけが見えるから、いよいよ本物の骸骨に見えるんだよ。それは、すごいよ。はじめは骸骨はじっと立っていて動かないのさ。胆だめしの当番が鉦（かね）をたたいたら、それをきっかけに、骸骨は急に動きだすんだよ。すると当番はびっくりするよ。うわあと泣きだしたり、縄をひっぱることも、壁に名前を書くことも忘れて、一目散に逃げだすかもしれないよ。おもしろいよ」

「うん、それはおもしろそうだ。僕は骸骨になろうっ

と」

「僕も骸骨になるよ。骸骨は二人出すことにしよう」

「いやン、僕も骸骨にしてよ」

そばでさっきから聞き耳をたてていたブウちゃんがわりこんでいった。

「僕も、僕も……」

「いや、僕も骸骨だ」

良ちゃんも鉄ちゃんも骸骨志願だ。

「骸骨が五人もいちゃ多すぎるね。じゃあこうしよう。この五人が代りあって骸骨になって舞台へ出ればいいや。そのほかに、まだすることがあるんだ。たとえば

骸骨を見せるために懐中電灯をつけて照らす照明係が右と左と二人必要なんだ。それから、シロホンをひっかいてかりかりかりかりと音を出す擬音係もいるんだ。この音は骸骨の骨が鳴る音をきかせるんだ。これでちょうど人員は五人いるんだよ」

こうして胆だめしの遊びがはじまることになった。その廃工場を骸骨館と名づけ、胆だめしの当番はへい外から入ってひとりでその骸骨館へ入り、地獄の一丁目を探検して来なければならないことにきまった。

探検（たんけん）はじまる

胆（きも）だめしは地獄の一丁目の骸骨館探検！

この発表が少年たちをよろこばせたことといったら、たいへんなものだ。少年たちだけではない、少女たちまでが参加申込みをしてくるのだった。こわいけれど、どんな骸骨があらわれるのか、おもしろそうだからぜひ見たいというわけであった。

このことは子供仲間に電信のように早く伝わり、ずっと遠いところの隣組（となりぐみ）の少年少女たちまでが、僕

たちあたしたちも仲間に入れてよと申込んで来る始末(しまつ)だった。
　そうなると、清君をはじめ骸骨館準備委員の五少年も、たいへんなはりきり方で、その準備をいそいだ。白粉(おしろい)、煤(すす)と鍋墨(なべずみ)、懐中電灯、電池などと資材は集められた。骸骨おどりのすごさを増すために鬼火(おにび)を二つ出す計画が追加された。これは細い竹のさきに針金をぶらさげ、その針金のさきに綿をつけ、これにメチルアルコールをひたし、火をつけるのだ。すると鬼火のように青い火がでる。竹をうごかすと、火はぶらんぶらんとゆれるから、鬼火らしくなる。

骸骨館から、へい外の出発場までの間に、空缶をぶら下げた縄を高くはることは、他の子供たちの手で用意された。

気のきいた子供がいて、蚊取線香（かとりせんこう）を持って来たので、これは骸骨館係へわたされた。しかし骸骨館の中は意外にも蚊がいなかった。附近に水たまりが全然ないせいであろう。

ようやく日が暮れた。が、西の空に三日月が淡（あわ）い光を投げていた。

胆だめし当番の順序がきまった。

第一番は正太君であった。

がらんがらんがらん。これが三度鳴った。骸骨館の用意はできあがったという知らせであった。

「よし、では僕が一番に探検してくるぞ」

「することを忘れちゃだめだよ。中へ入ったら鉦（かね）を叩いて、ううっと呻（うな）って、それから縄をひっぱってさ、それから壁に名前をかいてくるんだ。さあ、この白墨を持っていきな」

「ああ、わかったよ。では諸君、さよなら」

「なにか遺言（ゆいごん）はない？」

「遺言？」

「だって正大君。君は骸骨を見たとたんにびっくりし

て死んじまうかもしれないからね。何か遺言していったらどうだ」

「ばかをいってら。誰がそんなことで死ぬもんか。僕の方が骸骨を俘虜（ふりょ）にしてお土産（みやげ）に持って来てやるよ」

勇ましいことばを残して正太君はへいの破れ目を越えて構内へ入った。南瓜畑（かぼちゃばたけ）の中を腰のあたりまでかくしてかさかさと音をさせながら前進して行く。廃屋（はいおく）の一つを越え、さらにもう一つの廃屋を通りすぎる。だんだんさびしさが増し、神経がいやにとんがる。もう一つの廃工場のわきをぬける。いよいよ骸骨館が目の前にあった。うすい月光をあびて、アルコール漬け

の臓器（ぞうき）のように灰色だ。

まん中のくぐり戸のところだけが、魔物（まもの）が口をあいているようにまっ黒だ。正太はあそこから中へ入らなければならないのだと思ったら、とたんにこわくなって引返そうかと思った。

だが、そんなことをしては、みんなからいつまでもけいべつされるばかりだから、そこで力をへそのあたりへうんと入れ、死んだつもりになってくぐり戸へ近づいた。「地獄の一丁目入口」と書いてある入口をついにくぐって骸骨館の中へ……。ぷうんとかびくさい。中は月光が乱反射（らんはんしゃ）で入って来ているところだけがうす

ぼんやりと明かるいが、他は洞窟のようにまっ黒で、何も見えない。骸骨も見えないのだ。

正太の手はすぐ鉦の在所を見つけた。骸骨のあらわれないうちに鉦をさっさと鳴らして、ここを出ていってしまおうと思った。

かんかん。かかーン。

鉦をうつ手がふるえて、うまく鳴らなかった。

「あっ！」

それがきっかけのように、正面にありありと二つの骸骨があらわれた。と、おどろおどろと青い鬼火が横あいからおどり出した。骸骨が手をのばした。正太の

方を指さした。それから手をぐっと上へのばした。

「ううッ」

正太はがたがたふるえながら、夢中で上からさがっている縄をひいた。遠くでがらんがらんと気味のわるい音がひびくのが分った。

骸骨同士が手をつないでおどりだした。もうたくさんだ！　正太はうしろの壁へ、白墨で自分の名前をかきなぐると、脱兎（だっと）のようにくぐり戸の外へとび出した。

わっはっはっ。骸骨の笑い声が、逃げて行く正太君を追いかけた。

意外な飛入

骸骨館の胆だめし大会は、大成功であった。子供たちは、こわいこわいとさわぎながらも大よろこびで、来る夜来る夜同じ遊びをくりかえした。

探検隊員の話では、鬼火が一番こわいという評判であった。骸骨が口をあーンとあくところがこわいというものもあったが、たいていの隊員はそんなところを見る勇気はなかったので、だまっているものが多かっ

た。
　ところが、骸骨係自身も、はじめはたいへんこわくて、もうよそうかと思ったと告白(こくはく)したので、みんなは笑った。しいんとしたあのさびしい骸骨館の中に、五人仲間がいるとはいえ、永い夜を送るのは気持のいいものではなかった。骸骨もすぐそばにいるし、鬼火もすぐそばで燃える。かりかりかりとシロホンが鳴れば、ほんとうに骸骨が鳴ったような気がする。そこへ向こうの草むらから、かんかーンと鉦(かね)の音がひびき、ううッと呻(うな)られると、すっかり身の毛がよだって、骸骨の方が「たすけてくれ」と悲鳴(ひめい)をあげたくなるというのだっ

た。

台風が来たので、骸骨館探検は四日ほど中休みをした。

五日目は、夕方すぎに風もおさまり、雨もあがったので、時間は少しおそくなったが、久しぶりで骸骨館探検をすることになった。骸骨係の清君、一郎君、ブウちゃん、良ちゃん、鉄ちゃんの五人は、道具などをかかえていそいそと薄ぐらい骸骨館の中へ入っていった。

五人は舞台の上へあがって、したくにかかった。

「おや、ここに乾パンの食いかけが散らばっているよ」

ブウちゃんが妙な発見をした。
「乾パン。あ、ほんとうだ。誰が持って来たの」
「ぼくたちじゃないよ。誰かほかのものだよ。でも、へんだね。誰かこんなところへ来たんだろうか」
なんだか気味のわるいことだった。
だがそのことは、骸骨館探検がはじまったので、そのまま忘れられた。
二番目の探検隊員としてトシ子ちゃんが入って来て、鉦(かね)を鳴らしたときのことだったが、思いがけないことが館内でおこった。それはトシ子ちゃんと鬼火がおどる舞台とのちょうど中間(ちゅうかん)の草むらの中から、とつぜ

んぱっと明かるい光がさして天井を照らした。思いがけない光だった。そんな光を用意したおぼえはない。鬼火二つは舞台でおどっている。

「きゃっ」

とトシ子ちゃんが叫んで、その場に腰をぬかした。舞台の骸骨である清君と一郎君も、もうすこしで悲鳴をあげるところだった。すると中間の草むらのあやしい火がゆれ、草むらの中から何者とも知れず人間の形がすうっと浮かびあがった。

「きゃっ。お助け……」

叫んだのは、そのあやしい人影だった。とたんにあ

やしい光が草むらに落ち、うごかなくなった。そして
あやしい人物を下から照らしあげたのである。人相のよくない一人の男が、ぶるぶるとふるえ、両手を合わせて、しきりに拝んでいる。拝まれているのは清君と一郎君――いや、例の二体の骸骨だった。

「盗りました、盗りました。わ、私にちがいありません。……はい、何もかも申し上げます。わ、私がかくしましたので……ここへ掘りました。館内防空壕の奥でございます。その奥をもう少し穴を掘りまして、そこへかくしておいたのでございます。……いえ、みんなそっくりしておりますす。百号ダイヤもそのままです。

おかえししますから、どうぞお助けを……。尊（とうと）い仏像から抜いた、もったいないダイヤを自分のものにしようと思った私は、罪ふかいやつでございます。しかしみんなおかえししますゆえ、どうぞ私を地……地獄へはやって下さるな。ああ、おすがりします。なむあみだぶ、なむあみだぶ、うへへへ……」

「いや、ゆるさぬぞ。きさまはこれから地獄へつれて行く……ここは地獄の一丁目じゃ。それを知らぬか。いひひひひ」

「ややヤッ、お助け……ううーン」

あやしい人影は、へたへたと草むらの中にくずれる

ように倒れ、気を失ってしまった。すべて骸骨係の演出がじょうずだったせいであり、ことに清君が、自分のこわいのをがまんして、「いや、ゆるさぬぞ、これから地獄へつれて行く……」などとへんな声で骸骨のせりふをいったのが、よくきいたのだ。

ブウちゃんがとびだしていって知らせたので、警官隊がやって来て、あやしい男をとらえた。この男こそ、かねて捜査中の五百万円のダイヤの入った箱を盗った犯人であった。彼がその箱を土中から持ち出そうとしたとき、ちょうどうまく骸骨おどりにぶつかって、胆をつぶしてしまったのであった。自分がうす暗いこと

をしているから、骸骨にびっくりしたのだ。

このことがあって、廃工場の建物はすっかり取り払われた。そしてあとに広いグラウンドができた。少年たちは大よろこびで、そこでベースボールをはじめた。大犯人捕縛（ほばく）と五百万円ダイヤ取りもどしのごほうびとしてもらった二組のベースボールの道具を使って、少年たちは大にこにこである。

底本：「海野十三全集　第12巻　超人間X号」三一書房
１９９０（平成２）年８月15日第１版第１刷発行
初出：「こども朝日」朝日新聞社
１９４６（昭和21）年10月１日号
入力：tatsuki
校正：原田頌子
２００１年11月12日公開
２００６年７月30日修正

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。